



●梅
一枝を手折りて行かん岡本の梅の盛りを見ぬ友のため

備後 岡田三米

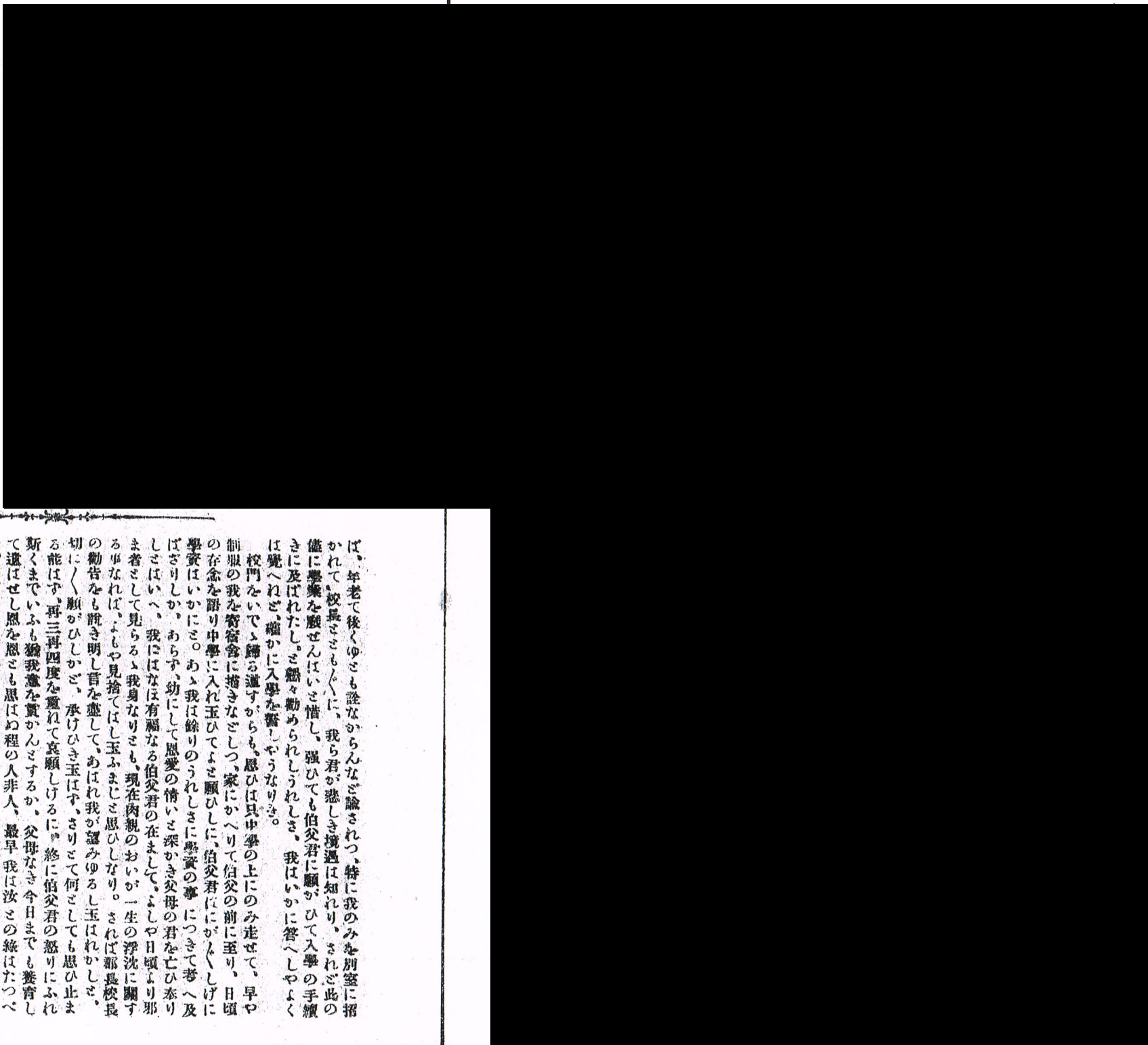
○暮春 備後岡田道代

惜しめども春はすげなく更にけり
又逢ふ時の我身やいかに

●ほたる

備後 岡田美那子

五月雨の名残の露はかつちりて螢さふなり小野の草むら



● 小 使

備後上下町 岩 谷 敏 雄

あゝ我は何がために此世に生まれ来りしやらん、徒らに小さき胸を苦しめんとてか、あゝ神は何がために我を此土に出だせしやらん、空しく陽死の處ならしめんとてか、思へば悲しき我が運命！

さるにても今年の春、小學卒業證書授與式の折柄、我が甲の郡長は我等卒業生を講堂に集めて、靜々として中學教育の必要を説き、今後何等の事業をなすにもせめて學中だけはすまし置かでは、常にほかなき境遇にさすらひて、到底頭の上の時はなかるべし、青年にして學ばざれば

ば、年老て後くゆさも詮なからんなど論されつ、特に我のみを別室に招かれて、校長ささもくへに、我ら君が悲しき境遇は知れり、されど此の儘に學業を願せんはいさ惜し、強ひても伯父君に願ひて入學の手續きに及ばれたし。さ懇々勸められしうれしさ、我はいかに答へしやよくは覺へれど、唯かに入學を誓しやうなりき。

校門をいで、歸る道すがら、思ひは只中學の上へのみ走せて、早や制服の我を寄宿舎に描きなごしつ、家にかへりて伯父の前に至り、日頃の存在を語り中學に入れ玉ひてよと願ひしに、伯父君にがくしげに學費はいかにさ。あゝ我は餘りのうれしさに學費の事につきて考へ及ばざりしか。あらず、幼にして恩愛の情いと深き父母の君を亡び奉りしとはいへ、我にはなほ有難なる伯父君の在りて、ふしや日頃より那ま着として見らるゝ我身なりとも、現在肉親のおいが一生の浮沈に關する事なれば、よもや見捨てはし玉ふまじと思ひしなり。されば郡長校長の勸告をも聞き明し言を盡して、あはれ我が望みゆるし玉はれかし。切に願ひしかど、承けひき玉はず、さりて何とて思ひ止まる能はず、再三再四度を重ねて哀願しけるに、終に伯父君の怒りにふれ斯くまでいふも猶我意を貫かんとするか、父母なき今日までも養育して遣はせし恩を思ふは程の人非人、最早我は汝の縁はたつべし、如何にさも勝手にせよとさへ言はれたり、我は悲しさに胞蓋かりて言葉もいえず只涙のみ、如何にせばやと思ひわづらへど、ばら／＼として格別な策も浮ばず、漸くにして伯母なる人にすがりて託言をなし、其翌日伯父君より、自活すべく備後銀行に小使を勤むべしと申渡されぬ、悲しき口惜しき言はん方なし。

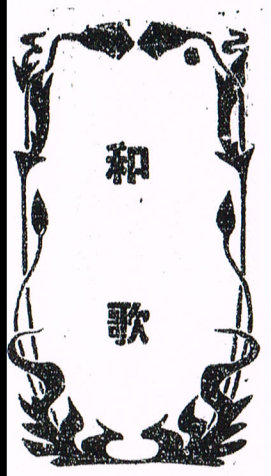
萬事休す、今は詮なし、ふしや百度千度願ふも聞き入るゝ伯父君には非らず、あはれ我が父母の在りて、唯僅かの金だにあらば、斯かる苦しきはなかるべきに、聞けば我が同級の誰彼、中學に商業學校にあそび、のみならず、我がいさなる花子すら、こたびい／＼京都に物學びせんさすさ、我は羨ましき恥かしさに胸破るゝばかり、あゝ我は運命を思ひては、やらん方もなき心地に涙あふれて、一夜を床に流しぬ。

斯くして我は終に、萬解の憾をのんで伯父君の命に従ひ、夢にだに
期せざりし銀行の小使となりたり、涙のうちに此の十ヶ月を……

○月

神戶岡田道代

荒れ果てゝ見るものもなき渡良瀬の
堤防十里月たゞしろさ

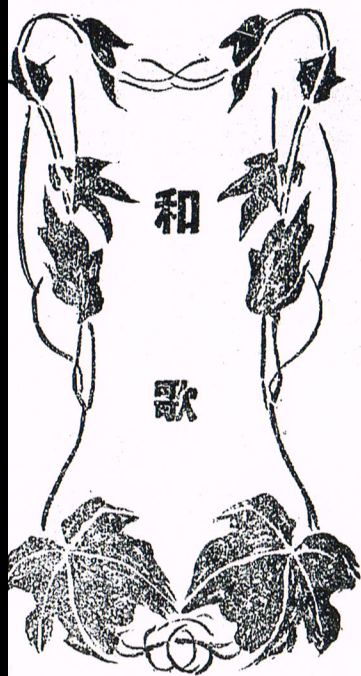


○梅 備後 岡田紫菫
朧ろく月のうつれる池の面に汀の梅のはな散りかゝる

○春の歌 備後岡田 涙
音もなく三片四片の花散りて
月おぼろなり山の下庵

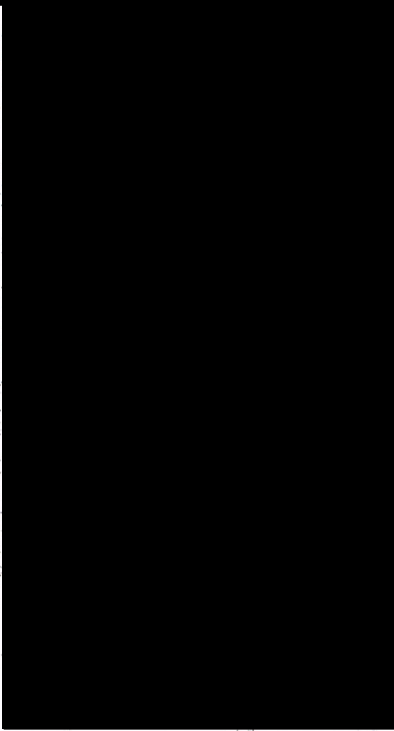


●渡良瀬の邊りを思ひて神戸 岡田美知代
毒水の流れ絶へせぬ渡良瀬は春とは名のみ草も萌出す
●霞 備後 岡田眞鏡
渡守よばう聲のみきこゆなりつゝみ三里を霞とさして



○五月雨 備後 岡田紫野
野の寺に友のひつぎを見送りし

其夜よすがら五月雨のふる



◎ 半 通 岡 田 美 知 代
いたで貢ひし武士一人大刀とりて見かへるそらに時鳥なく

わが運命

町田區土手三番町
二十七番地淺井方

岡田美知代

私は今年二十三の處女です。幼い頃は或る田舎の豪農の離座敷に母と共に住みました。母は他國から流れ渡つた塗物師の娘で、人の諷評に、穢多の血を引いて居るとか申しまして、色は白いと云ふよりも寧ろ青白い方で、蠟の様な思ひ／＼致しましたが、愁ひ顔の非常な美人で、悲し氣な眼元にじつと見入られた時等、假令母の顔は見上げませんでも、其悲しい／＼眼を思ふと、私は得堪へず涙にむせんで、いつもその胸に抱き付くのでした。

旦那と云ふのは脊のお高い、嚴めしい様子の老人で、其筋張つたお手で私の頭を撫で、は、袖や／＼とお菓子を被下つたのですけれど、私は何だか恐い様に感じ

ました。母とは兎角他所／＼しく、餘り口もおき／＼なさらなで、時たま二言三言仰有る事が有つても、それは極めて簡單な要事ばかりで、すぐ又元の沈黙にお歸りなすつて、金張りの煙管に煙草をおふかしなされるのです。

私が十二の時でした。或日私が女中部屋の前を通りかゝつた時、私は容易ならぬ事を聞きました。それは私が旦那の實の娘だと云ふ事なので、

其後間もなく母は旦那の命令で、執事の新木と云ふ男の許に、私をつれて嫁ぎました。

私は忘れは致しません、それは結婚の前日でした。「母様、本當なの、私が旦那の娘だつて事本當なの」と私は堪へ兼ねて言いました。「袖や、お前はまさ／＼かい、お聞きなの……誰に……もう／＼そんな事云つてお呉れでない」と、母は震へながら幾度か繰り返すので、私共母子は互に抱き合つて、劇しく／＼殆ど終日を泣いて／＼泣きました。それからと云ふもの、私は只の一言も其事に就いては語りませんでした。けれ共……母の愁はし氣な様も、悲し氣な眼元も、何故私が黙つて居なければならぬかも、今はすつかり解りました。私の不幸は其日から始まつたのです。

新木は母を愛しては居ないので、勿論母とても渠を愛しては居りません、新木は金の爲に結婚し、母は服従に餘儀なくされたばかりですもの。

斯くて程なく母はみまかりました。何と云ふ哀れな運命でせう、私共母子の愛は無意味の愛でした、お互の胸の奥深く或物を秘しつゝ、終に何一つ打明る事なしに了つたのです。私は何時かは母の口から此秘密の洩らされる事と思つて居りました、けれ共母はその最後の時すら、只一言をも打明けては呉れませんでした。父は（旦那ではありません、確に父です、私は母の手文庫に證據の書類を見ました）母の死後幾分か氣落のした様にも見受けましたが、私が十八の年、ふとお風召したのがもとで、終に重い病の床におつき遊して、私は看病にとて、日毎お邸へ通つては、お枕元で小説等をよみました。父は折々何か物云ひ度げの様子が見えまうので、私は「あなた私の父様ね」と云つて見やうかと、幾度思ひましたでせう、けれ共其都度わざと黙つて室を出るのでした。

到頭父は死にました、現在父子でありながら、父と云はれ、子と呼ぶ事すらなし得て死にました。新木は私を邪魔にして、随分虐待致しましたが、興へらるべ

き遺産をあてに急にちやはや機嫌をとるのです。

父の死後はこれ迄東京の某省に重い役をつとめて居られた義弟が御歸り遊して、萬事を整理なさるのでうで、程なく旦那はお着きになりました。父よりは十歳ばかりの年若で、そのものごとの嚴な事、奥様は早くに御死去なさつて、若様は都に御勉強中とか。或日私は御書齋に召されて、旦那から種々おやさしく慰められました「何かお前に遺された財産でもあるかと思つて探して見たが、そのやうな書類は一枚も無い、尤も其れが無いからつて別に不思議はないので、だがお前は兄の病中よく世話をして呉れたそうぢや、これは禮の印に俺から……」と、殆ど恩惠的に頂いたのは幾らかの公債……父とのえにしはこれに依つて斷たれたのではありますまいか……私は云ひ知らぬ思ひに、一人部屋に退いて、久しく／＼泣きました。

其後私は小間使として旦那のお傍に事へしましたが、折々意味深い眼元に私を見入りながら「お前の手から貰ふ茶の味は又格段ぢや」等、仰有る旦那がいやらしく私はお邸へ参るのも嫌でした。と云つて家に歸つたとて、慰めて呉れる母もなく、新木の苦い顔を見るばかり。其年の暮の事です、士官學校を御卒業の若様は

新しい少尉の服を召して御歸省なさいました。

嗚呼、私は此後を静かに書き續ける事は出来ません、こは思ふべく餘りに堪へぬ苦痛です、併し其様な事を云つて居たとして際限は有りません、事實私は若様を戀し、若様は私をお愛しなされたので……

旦那様は何うしたものか、若様が私に親しくなるのを酷くお嫌ひ遊して、或夜私が旦那の御書齋で琴を調べて居りますと、入つておいで遊したは若様で、腕組を遊した儘、静かに耳をお傾けなさいました。

『よさないか！頭痛がする!!』旦那はいつになく、俄に斯う仰有つて、私が障子を開けて出やうと致しました時、若様はつと座をお立ちなさるので、『何處へ行く、何處へ?』と怒鳴つて、急に笑つて、尙何事かを仰有つたやうでしたけれど、私には聞えませんでした。此様な事は其後幾度となく繰返されて、やさしかつた旦那は急にづらくなりました。

若様はお馬が好きでして、或日遠乗を遊した處お腕をけがしてお歸りなさいました。兼て乗馬には御熟達かの若様、つい一寸はねた位で御落馬なさるやうな事はない筈ですけれど、これもやはり運命で御座いませう。名醫は町から迎へられて治療に手を盡しましたが、醫

者は談話を禁じまして、讀書に馴れた私は若様付となりました。最初は讀書も致しましたが、四邊に人氣のない折々は、いつともなく私は書を閉て、若様を見守りました、すると若様も私をお見つめなさるので『お前は私の妻だよ、誰が何と云つても』と、繰返して仰有つた其言葉、嗚呼、これが何として忘れられませう。

御病氣はやがて全癒いたしました、今は御歸京の日の遠からず、此頃の私の胸！

愈々御出立の前夜、私は若様から秘密の御文を得ました。それは是非逢つて云ひ置き度い事が有るから、今夜の十時を期して、庭の亭に來て呉れとの事なので、十時の鐘を聞くや否、私は雪道を亭にと辿りました。亭に入て戸を閉し『若様』と、私はさくきやました。『此處に居るのは俺ぢや』と何者か答へて、私の胸は裂けました。私の前に立つたのは旦那です。私は逃げやうと致しましたが、腕は酷しく捕へられて身動きも出来ません、『若様助けて、若様!』馬鹿奴、静にしる、若は俺が幽閉して呉れた、貴様は若と夫婦約束をしたか、尋常に告白しろ!』私は勿論一言の答も致しません。『だが袖や無理もないわ、若い者の生命は戀ぢやかの、否老寄つた者の戀は一際哀れとお前は思はんか』

私は黙つて只うつむきました。

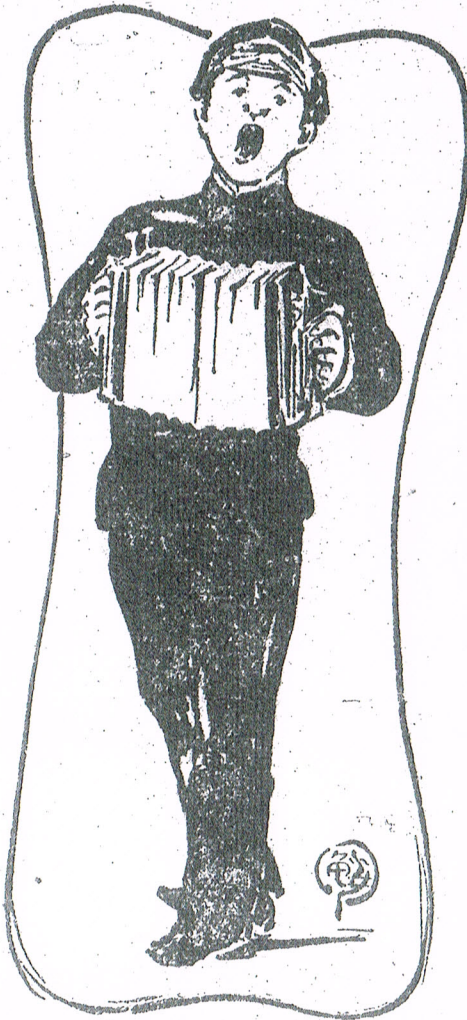
『いや哀れなものさ、皺はよる腰は曲る、全くの片戀ぢや、これ程までに思ふ俺の心を、のう袖や、哀れと思つては呉れないか!』……『これ何とぢや、こんなに思ふ俺の心を……』あなたの兄様は私の父あなたは私の伯父さんです、私は若様を……』

『黙れ不埒者奴、貴様の母は穢多でないか、今日限り出入りはならんぞ』

私は新木に引渡されました。

其後新木が如何

に酷しく私を虐待したかは云はでもの事です。渠は私故に執事の役にはなれ、年來の出入をも止められたのですもの、あつても私は何たる不運の星の下に生れたのでありませうやら、思ひも掛けぬ人から、烈しく而も不自然に愛された爲め、幸あるべき戀にも破れ……こころ!



斯くて一年、二年……四年、五年と、辛い月日も涙

の中に明けて暮れて、私は幾度自殺を思つたでせう。

口惜しい悲しい味氣ない思のやみに閉されながら、

尙私をして死の道を辿らせやうとしなかつたのは、只一通……今もなほ御身の愛を忘る能はず……の御文が

あつたため、その暗い……雲の底にまた……星のやうな一點のうすい光明をたのんだからで、

と云ふのは何時か若様の御傍に事へ奉る事も出来やうかとの、儚ない希望に外

に酷しく私を虐待したかは云はでもの事です。渠は私

けれども今はその、微かなる希望の光明すら全く消え果てました。

戀しく、戀しき御名を今日の號外の上に認めた私の

あゝわが若様は御戦死遊したので……(完)